

環境学を専攻する学生を対象としたライフヒストリー研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学環境研究所 公開日: 2016-11-01 キーワード: 作成者: 村松, 陸雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/306

環境学を専攻する学生を対象とした ライフヒストリー研究

An Attempt Study on the Life Histories of Students Majoring
Environmental Studies in Higher Education.

村松陸雄*
Rikuo Muramatsu

問題

著者は大学生と環境教育に関連した講座やワークショップを開催することがあるが、そういった機会に決まって思うことがある。それは、「この講座は参加者に本当に役立っているのだろうか?」「今回の環境教育の学びは何か?」という問いである。

環境教育に限らず教育の効果を把握することはなかなか難しい。もちろん、教育内容や教育の到達目標をどのあたりに位置付けるかによる。教育の到達目標を、環境に関する知識の量や計算式の運用能力等のように定量的に定義可能な場合には、講座の前後に教育の到達目標に対する達成の程度を測定できるテストを講座の受講者に科して、そのテストの結果の違いを比較検討することで教育の効果のある程度把握することはできる。

他方、教育の到達目標を、例えば、「持続可能な未来の構築に貢献する人材を育成する」「人間特例主義から新環境パラダイムへシフトする」「環境配慮的なライフスタイルを確立する」といった、抽象レベルを高くすると途端にその教育効果を把握することが困難となる。何事にも早急な結果が求められる時代的な風潮のせいも、教育効果が数値的に実証できないとなると講座自体の存続の危機に瀕する事態となりうるため、教育実践報告書等でも窮余の策として「参加した子どもたちの目がキラキラと輝いていた」「児童は生き生き活動に取り組んでいた」のようにとっても科学的とは言い難い、主観的な描写でもって教育効果を説明することに終始するケースも散見される。

そもそも数回の講座を受講することだけで劇的に価値観を変容させることが可能な教育が存在するならば、それはそれでとても空恐ろしい話である。實際上、期間限定で開催された単発的な講座による短期的な影響はそれほど有意でないとするのが現実的な解釈であり、講座による影響だけでなく講座以外の要因などを含めた複合要因をシステム論的に理解する、換言すればホリスティックな方法論によるアプローチが必要であるように思われる。

上述した、教育実践に対するプレテスト、ポストテストの結果を比較することで教育実践の効果把握しようとする研究はこれまで数多くなされているが(図1)、このような先行研究で一貫して示されている知見に、時間が経過するに伴い教育効果が大幅に低減するということがある

*環境学部教授

(例えば、James Gray-donald & David Selby, 2008)。中等教育課程において環境関連科目が教科として導入されている韓国などとは異なり、わが国では、環境学をクロスカリキュラムの中で教育する仕組みとなっている。そのため、複数の担当教員や教員以外の立場の人々が関与することが多い総合的学習の時間を含めた複数の科目や学校行事というべき移動教室、校外学習等として実施される自然体験を主眼とした環境教育など、一貫的なカリキュラムに基づいた教育が展開されるというよりはむしろ、比較的長い期間に、多様な教育が単発的でアドホックな形で展開される。このことから、学習者にとって非可逆的な時間軸において、環境学に関連した様々な学びが有機的に展開できるかが重要となる。同様な問題提起は、防災教育の分野でもなされており、矢守(2002, 2003)は、阪神淡路大震災の被災者を対象としたケーススタディから、震災体験が時間の経過とともに風化している過程を精緻に分析し、防災教育の観点から貴重な震災体験をいかに風化させないかについて検討すべきであると指摘している。

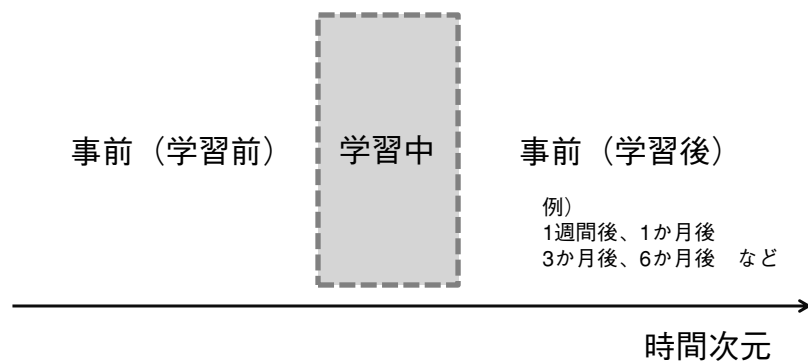


図1 学習過程研究における一般的な時間的な枠組み

人間の環境行動は、人生の発達段階における様々な出来事や経験などが相俟った結果であることは疑いもないことであろう。ただ従来から研究されてきたプレ/ポストテスト以上に長い時間的なスパンを射程に入れた研究を実施しようとすると、方法論的な困難さに直面することになる。従来、主流となっていた自然科学的なアプローチを背景とした定量的な方法論では、研究対象とした従属変数以外の要因による影響を統制することが難しく、研究の俎上にのせることすらできないのである。

最近の心理学研究の動向でエポックメイキングなことは、定量的アプローチを相補する方法論として位置づけることができる、質的研究の方法論の精緻化、洗練化が著しいことにある。2004年に、さいとうようこ、サトウタツヤら気鋭の心理学者が中心となって日本質的心理学学会が創立され、質的心理学に関連したテキストが出版ラッシュのごとく矢継ぎ早に上梓されていることに呼応して(例えば、無藤他, 2007; 伊藤他, 2005; クレスウェル・クラーク, 2010)、定量的アプローチでは研究対象となりえなかった、長期的なライフスパンを視座に入れた研究テーマについても質的心理学の方法論を用いて、豊潤な人間理解を得るような示唆に富んだ研究知見が報告されつつある(例えば、安田, 2005; 中坪・小川・諏訪, 2010)。

環境教育研究の分野では、長期的な時間的要因に着目した研究はほとんどなされてこなかったが、降旗ら（2006）は、環境的行動（Responsible Environmental Behavior）につながる重要な体験をSLE（Significant Life Experience）と定義した上で、環境教育指導者を対象としたSLEに関する調査研究を実施した。その結果、回答者の全員が子ども時代や学生時代に近く自然の中で遊ぶなど豊かな自然体験をしていたことがわかった。さらにSLEには環境的感性を形成する「基礎的SLE」と、環境的行動の直接的な引き金をひくような体験である「直接影響的SLE」の2つに大別されることが明らかになった。

発達心理学の分野では、アイデンティティ発達やキャリア展望を理解するために、「過去」、「現在」、「未来」の連続性に力点を置いた時間展望に関する研究知見が蓄積されている。例えば、高澤ら（2010）は、職業展望浮沈曲線を用いることで職業に対する将来の浮沈感を記述し、その浮沈感と大学卒業や就職といったライフイベントが個人の職業展望との関係性について検討している。

環境的行動にも様々なタイプの行動があるが、大学入学時の進路先として環境学科を選択し、環境学を専攻することも重要な環境的行動の一つである。本研究では、環境学科環境学専攻に在籍する学生を対象としたSLEに関する調査を実施することで、過去の人生経験が大学における専攻科目として環境学を選択することに及ぼす影響を明らかにする。さらに、環境学を専攻する学生が、入学前から入学後の現在に至るまでの期間における「環境」に対する興味・関心についての心理的変遷を、ライフヒストリーの観点から把握することを試みる。

方法

本研究は、下記の【調査1】【調査2】【調査3】から構成されており、調査協力者は、すべて著者が奉職する大学の環境学部 環境学科 環境学専攻に在籍している学生である。

【調査1】

調査協力者：環境学科環境学専攻1年生90名（男性48名、女性42名）。

手続き：2011年5月に著者が担当している授業「環境基礎」の時間内に質問紙を配布しその場で回答することを依頼した。時間内に回答できない人については、後日に回収した。

質問内容：

（設問1）「環境学科に入学されたみなさんは、「環境」に興味関心を持っていると思います。「環境」に興味・関心を持つきっかけとなった出来事（SLE: Significant Life Experience）について、いつ、どこでどのような内容か？など、書いてください。複数の出来事がある人は、思い浮かぶだけ書いてください。」 ※オープンエンド形式による設問である。

【調査2】

調査協力者：環境学科環境学専攻1年生から4年生113名（男性60名、女性53名）。

手続き：2011年10月に著者が担当している授業および別の教員が担当している授業の時間内に質問紙を配布しその場で回答することを依頼した。時間内に回答できない人については、後日に

回収した。

質問内容：

(設問2) 「「環境就職」という言葉を聞いて連想することを、出来るだけ多く自由に書いてください。どんなにささいなことでも構いません。」 ※オープンエンド形式による設問である。

(設問3) 「あなたがなりたいと思う(思った)職業(もしくは、仕事内容)を書いてください。」
 ※年代ごと(小学校時代より前/小学校時代/中学校時代/高校時代/大学時代(現在))に分けて回答するように教示した(表1)。

表1 設問2の回答欄

年代	職業名(もしくは、仕事内容) ※回答が複数ある場合には全て記入してください
小学校時代より前	
小学校時代	
中学校時代	
高校時代	
大学時代(現在)	

【調査3】

調査協力者：環境学科環境学専攻3年生と4年生17名(男性10名、女性7名)。

手続き：2011年5月に著者が担当している授業「環境学特殊講義4」において、A3サイズの回答用紙(図2)に、10歳から現在までについては、環境に対する興味、関心についての実際の意識を、現在以降については今後の展望を曲線で記述することを求め、「ゼロを境界として、その年齢時に環境に対する興味、関心がポジティブであればプラスの方へ、ネガティブであればマイナスの方へ曲線を記述する」ように教示した。この方法は、川島(2007)や高澤ら(2010)の手法を参考にして、人生における出来事が環境に対する興味、関心についての浮沈曲線に及ぼす影響を把握することを目的とした。全員が回答を終了したことを確認した後、一人ずつ口頭で内容を発表してもらい、履修者全員でそれぞれの発表内容を共有した。分析は、人生の出来事と浮沈曲線の線形の変化があった部分との関係や転換点の数の変化をとらえ、人

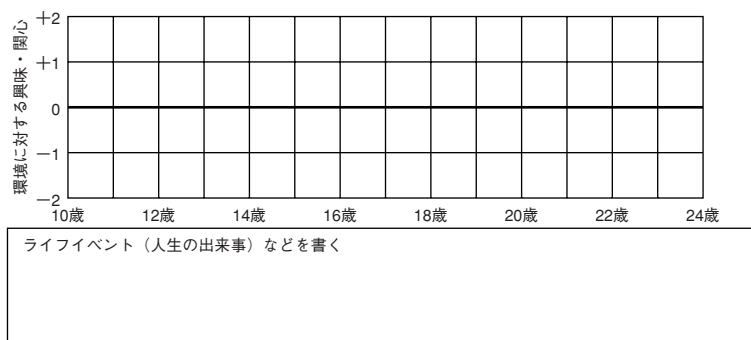


図2 調査3で用いた回答用紙

生の出来事とそれぞれの浮沈曲線を記述した時点における環境に対する興味、関心の度合いの変化を検討した。

結果と考察

表2に、「環境」に興味・関心を持つきっかけとなった出来事（SLE: Significant Life Experience）の時期を示す。なお、回答のうち、時期が判別不明なものは除外した。回答者によっては複数の時期を回答したのもあったが、それぞれ別個の回答として集計した。SLEの時期としては、小学校が35件で最も多く、次いで中学校、高校が20件であった。

表3に、SLEの回答内容の内訳を示す。自由記述の回答をカテゴリーごとの頻度件数をまとめたものである。「自然体験」が21件で最も多く、次いで「近隣の環境破壊」が12件、「スチュワードシップ」が11件、「親や家族の影響」が9件、「環境教育系団体所属」が5件の順で件数が多かった。「スチュワードシップ」とは、環境を守ることに使命感を感じ未来の世代のために自分が何とかしなければならぬという決意が記述された回答を分類した。本調査は、質問紙調査のため、「スチュワードシップ」を想起する要因については明らかではない。また、「映画」「テレビ」「ニュース」「メディア」「インターネット」「新聞」などメディア媒体による影響も強いことが明らかになった。教科科目による影響に関しては、「理科」「生物学」「地学」「物理学」など、自然

表2 SLE（Significant Life Experience）の時期

幼稚園	1
小学校	35
中学校	20
高校	20

※表中の数字は件数

表3 SLE（Significant Life Experience）の内容

自然体験	21	京都議定書	1
近隣の環境破壊	12	地震不安	1
スチュワードシップ	11	水害を体験	1
親や家族からの影響	9	釣り	1
映画	6	メディア	1
テレビ	5	インターネット	1
ニュース	5	新聞	1
環境教育系団体所属	5	アーティストの影響	1
異常気象の実感	3	地学	1
シビックプライド	3	物理学	1
総合的学習の時間	3	エコプロダクト	1
理科	3	ゲスト講師講演会	1
書籍からの影響	3	サイエンススクール	1
生物学	2	ビオトープ	1
保健体育	2	社会科	1
東日本大震災	1		

※表中の数字は件数

科学系の科目を回答する人が、社会科学系科目よりも多いことがわかった。「総合的学習の時間」も3件の回答があり、ある一定の影響があったことが示された。

表4に、「環境就職」という言葉に対する連想語の頻度件数の一覧を示す。「企業」の29件を筆頭に、「NPO/NGO」の17件、「環境省」の14件、「活動」の11件、「エコ」の10件、「環境配慮」の10件、「環境部門/環境部署」の10件などの順で件数が多かった。具体的な職業名、業界名としては、「教員」「理科教員」「農業」「研究者」「自然」「公務員」「エコツーリズム」「ゴミ関連」「食品」「森林」「環境コンサルタント」「気象予報士」「電機メーカー」などが連想されていた。少数意見ではあるが、「低賃金」が2件、「ボランティア」が4件あり、「環境就職」が職業として成立していないと認識している学生が存在していることを示唆しており、環境学科において環境人材を育成する立場として看過できない回答である。

表4 「環境就職」に対する連想語の一覧

連想語	件数	連想語	件数
企業	29	食品	3
NPO/NGO	17	森林	3
環境省	14	低賃金	3
活動	11	業界	2
エコ	10	CO ₂ 削減	2
環境配慮	10	フィールドワーク	2
環境部署/環境部門	10	解決	2
教員	7	環境コンサルタント	2
リサイクル	7	環境ビジネス	2
環境保護/環境保全	6	環境知識	2
農業	6	環境負荷	2
環境関連	6	気象予報士	2
研究者	5	時代	2
公務員	5	実際	2
自然	5	従事	2
ボランティア	4	人	2
CSR	3	電機メーカー	2
エコツーリズム	3	必要	2
ゴミ関連	3	理科教員	2
環境教育	3	理系	2
環境問題	3	緑	2

※件数が2件以上の結果のみ表記

表5に、「なりたい職業」の年代ごとの変遷を示す。なお、現在（大学時代）、環境に関連して職業につくことを「とても希望する」と回答した人の結果のみを集計した。〈小学校時代より前〉や〈小学校時代〉においては、「ケーキ屋」「サッカー選手」「パイロット」「花屋」「宇宙飛行士」などをあげる回答者が多く、これらの結果は、Benesse教育研究開発センター（2009）が実施した第2回子ども生活実態基本調査と同様な傾向が示された。

〈高校時代〉〈大学時代〉において、「環境関連のサラリーマン」「環境関連」「環境に携わる仕事」「環境系の仕事」など具体性に欠く回答や空欄のまま回答が目立つのはたいへんに気がかり

な点である。環境学科は、薬学科、看護学科など職業に直結する、いわゆる、プロフェッショナル学科とは異なるとはいえ、環境学の専門教育と将来のキャリア展望に不連続性が認めざるを得ない。大学におけるキャリア教育の観点から、本研究の結果をより詳細に吟味する必要があると思われる。

表5 なりたい職業一覧

被験者 No.	小学校時代より前	小学校時代	中学校時代	高校時代	大学時代(現在)
S77	ケーキ屋	美容師		環境系の仕事	環境系の仕事
S82	ケーキ屋	お店や	学校の先生	学校の先生	学校の先生
S18	サッカー選手	公務員	野球選手	環境関係の仕事	休日がしっかりある職
S37	サッカー選手	サッカー選手	サッカー選手	公務員	公務員
S79	サッカー選手	サッカー選手	サッカー選手		
S23	スポーツ選手	スポーツ選手	研究職	研究職	研究職
S30	パイロット	パイロット	環境関連のサラリーマン	環境関連のサラリーマン	環境関連のサラリーマン
S65	パイロット	パイロット	パイロット	環境マネジメント	環境マネジメント
S9	パン屋	パン屋	水族館の飼育員	一般企業	環境を生かせる会社の企画部
S80	ピカチュウ	宇宙飛行士	宇宙飛行士		
S98	虫博士	虫博士	スーパーマン	スーパーマン	一般的な社会人
S63	歌手、バレリーナ	役者	役者、声優	役者、声優	環境関連の仕事
S87	花屋	医者、弁護士	公務員になり地方の川を掃除	公務員	公務員、企業の環境部に入り環境保護を提唱したい
S39	花屋、ケーキ屋	花屋、コンビニ店員	小学校の先生	環境に携わる職に就く	環境をよりよくする仕事
S78	花屋、パン屋	ペットショップ	調査師	調査師	環境学の知識で貢献できる仕事
S15	花屋、ケーキ屋、ピザ屋	保健の先生	養護教諭	心理カウンセラー	ネイチャーガイド
S61	建設業	建設業	建築士	環境関連	環境関連
S75	体操選手	体操選手	教師	気象予報士	気象予報士
S50	大工		生物調査	魚を交配させるやつ	環境保護
S4		サッカー選手	サッカー選手	サッカー選手	環境コンサルタント
S7		小学生の先生	小学生の先生	環境に携わる仕事	環境に携わる仕事
S24			教師	環境活動をしている企業	環境活動をしている企業、公務員
S29		エレクトーン講師	研究職	アナウンサー	研究職
S40			資源開発に関わる仕事		
S64		プロ野球船首		環境系の公務員	環境系の公務員
S71		自衛隊	消防士		お金に困らない仕事
S72				環境系の公務員	環境系の公務員
S76			公務員	環境保全系、コンサルティング業	環境コンサルティング業
S100		大工	先生	先生	先生、環境系

※現在(大学時代)、環境に関して職業につくことを「とても希望する」と回答した人の結果のみを集計

図3～図5は、環境に対する興味、関心についての浮沈曲線の回答例である。それぞれの回答者独自の個人史を投影した形で、長期的な時間軸における環境に対する興味、関心の変遷過程と人生における出来事との関係を把握することができた。

今回、回答例として紹介した3名のいずれの結果においても、大学入学以降に、環境に対する興味、関心が増加するというよりも、むしろ、停滞、減退する傾向を示している。あくまでもケーススタディではあり一般化した結論を導くことは難しいが、せっかく高い志をもって、大学で環境学を専攻するという環境の行動を選択したにも関わらず、環境に対する興味、関心が向上、

もしくは持続しないことはとても残念な結果といえる。

環境省(2008)は、次代の環境人材育成の3大要素として①強い意欲、②専門性、③リーダーシップ、が求められることを示した上で、これらの3大要素を統合的に学ぶことが可能な大学、大学院が最適で効果的な学習時期であると指摘している。その意味で、大学、大学院の環境教育のあり方が非常に重要になってくるといえる。今回の結果が、学科のカリキュラムの内容に問題があるのか、職業キャリアの将来展望として、環境就職が具体的にイメージできないことが原因

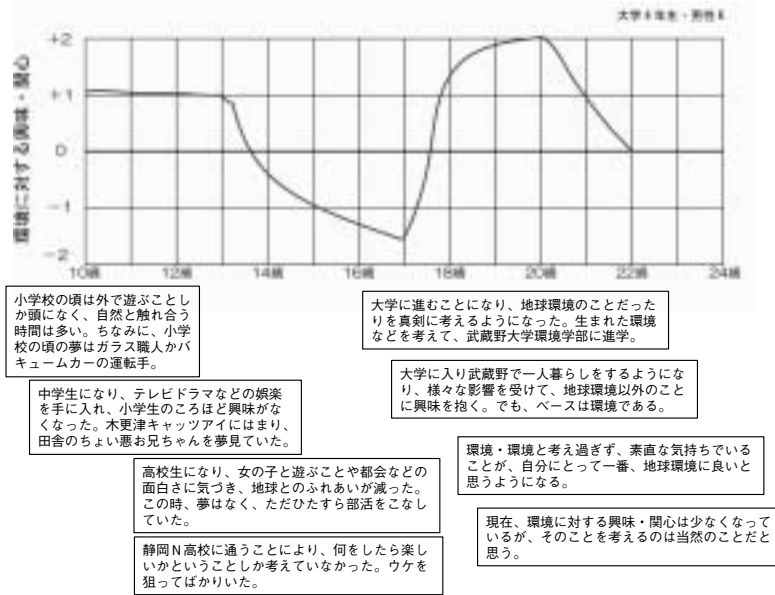


図3 環境に対する興味、関心についての浮沈曲線の回答例1 (大学4年生・男性K)

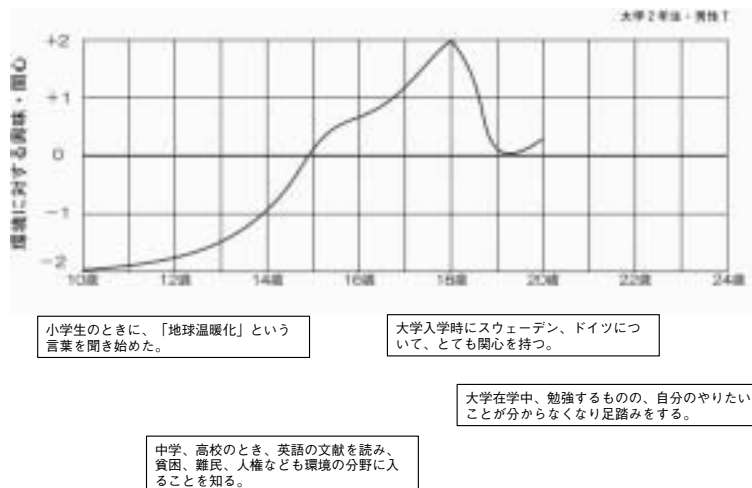


図4 環境に対する興味、関心についての浮沈曲線の回答例2 (大学2年生・男性T)

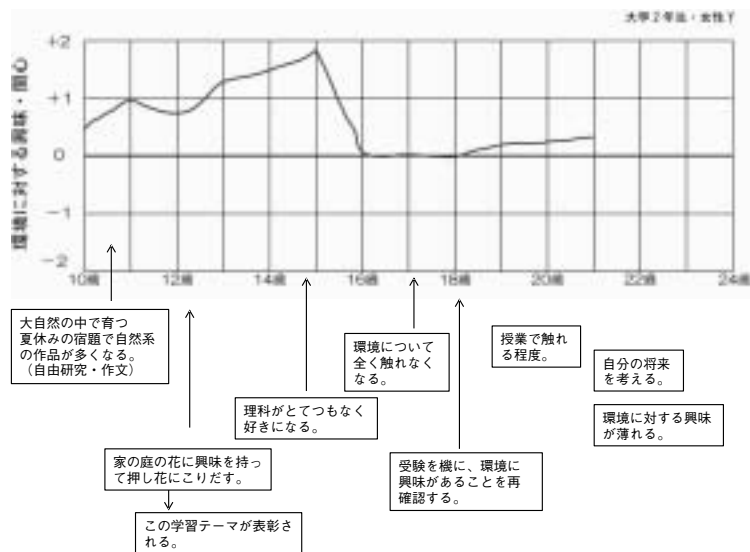


図5 環境に対する興味、関心についての浮沈曲線の回答例3 (大学生2年生・男性Y)

なのか、はたまた別の要因によるのか、拙速な判断を下すことはできないが、早急に原因究明を進めていることが肝要であろう。

まとめ

今回、報告した調査研究は、あくまでも試行的、かつ、探索的な取り組みであり、多くの改善の余地が残されている。以下に本研究の課題を列記し、それらの課題を踏まえながら今後の研究を展望することでもって本稿を了としたい。

まず、研究協力者の属性に関して、今回の研究では、著者が奉職する大学の環境学科の学生のみを対象としたが、同じ環境学を専門とする学部学科であっても、大学ごとに理念やカリキュラムが異なる。今後、他大学の学生を対象にした同様な調査を実施することは有益かもしれない。また、本学環境学科が第1志望でなく不本意入学の学生や、そもそも、環境学を専攻すること自体が第1志望でなく他の学問領域の学科に入学することが本命だった学生が含まれている可能性も否定できない。次回の研究では、このような属性情報を踏まえて分析を進めるべきである。

別の課題としては、追加分析の余地が残されている点が挙げられる。例えば、今回、調査1と調査2の結果を出現頻度に基づく分析のみで議論したが、テキストマイニング手法を用いて出現語句間の共起関係、依存関係等を探る対応分析を実施することで新たな様相を把握することができるかもしれない。さらに、調査3に関して、調査協力者に対する追加インタビュー調査を実施することで浮遊曲線が変曲した理由をより丁寧に傾聴し、調査協力者の心理過程のダイナミックな変容に影響を及ぼす要因を詳らかにすることができるであろう。

既述したとおり、近年、質的心理学の方法論がものすごく勢いで進化している。例えば、Valsiner & Sato (2006) は、人間の成長を時間的変化と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記

述するための方法論的枠組みである、TEM（複線径路・等至性モデル：Trajectory Equifinality Model）を提唱している。TEMを用いた研究は、さまざまなフィールドで実施されているが（例えば、安田, 2005；中坪・小川・諏訪, 2010）、環境教育研究の分野ではTEMを適用した研究事例は皆無である。本研究の問題をTEMの方法論を用いて再検討することで、より豊潤な人間理解が得られることが大いに期待できる。

レヴィン（1951）は、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」を時間的展望（time perspective）と定義し、個人の行動が、現在の事態のみに依存しているのではなく、未来に対する願望や、過去の自分の事態によって影響されるとして生活空間における時間次元の展望が重要であることを示した。レヴィンの研究を契機として、発達心理学と教育心理学に関連した研究分野で、時間的な展望に関する研究が数多く蓄積されている。本研究は、ある意味で時間的展望に関連した研究といえるが、残念ながら、時間的展望のうち、「過去」「現在」「未来」の不可逆な時間軸の連続性を念頭に入れた時間的展望研究を推進することで、研究フェーズにおける新たな知見が獲得されることが期待されるだけでなく、環境学科のカリキュラムのあり方、専門教育と有機的に融合したキャリア教育の方向性など、実際的な課題に対する処方箋の手がかりを得ることにつながるであろう。

謝辞

この論文をまとめるにあたって、質問紙調査やヒアリング等でご協力頂いた学生各位には感謝申し上げます。また、本研究の一部は平成23年度卒業生の小川竜太氏の卒業論文の一環で収集したデータを再分析したものである。ここに記して謝意を表す。

引用文献

- Benesse教育研究開発センター（2009）. 第2回子ども生活実態基本調査報告書, Benesse教育研究開発センター.
- 降旗信一・石坂孝喜・畠山芽生・櫃本真美代・伊東静一（2006）. Significant Life Experiences（SLE）調査の可能性と課題 環境教育 15(2) p.2-13.
- 伊藤哲司・田中共子・能智正博（2005）. 動きながら識る、関わりながら考える—心理学における質的研究の実践, ナカニシヤ出版.
- James Gray-donald, David Selby（2008）. Green Frontiers: Environmental Educators Dancing Away from Mechanism (Transgressions: Cultural Studies and Education), Sense Publishers.
- J.W. クレスウェル・V.L. プラノ クラーク（大谷順子 訳）（2010）. 人間科学のための混合研究法—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン, 北大路書房.
- 環境省（2008）. アジア環境人材育成イニシアティブELIAS（Environmental Leadership Initiatives for Asian Sustainability）パンフレット, 環境省総合環境政策局 環境教育推進室.
- 川島大輔（2007）. 10. ライフレビュー, やまだようこ編（2007）. 質的心理学の方法—語りをきく, 新曜社.
- Lewin, K. (1951). Field Theory in Social Science. New York: Harper. [猪股左登留訳（1956）. 社会科学における場の理論, 誠信書房].
- 無藤隆・南博文・麻生武・やまだようこ（2004）. 質的心理学—創造的に活用するコツ, 新曜社.
- 高澤健司・半澤礼之・武田美亜（2010）. 大学生における職業展望浮沈曲線とライフイベントの関連 日本発

- 達心理学会第21回大会論文集 p.641.
- 中坪史典・小川晶・諏訪きぬ (2010). 高学歴・高齢出産の母親支援における保育士の感情労働のプロセス
乳幼児教育学研究, 19, 155-166.
- Valsiner, J. & Sato, T. (2006). Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology
become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In Straub, J., K?lbl, C.,
Weidemann, D. & Zielke, B. (Eds.) Pursuit of meaning. Advances in cultural and cross-cultural psychology
(pp.215-251). Bielefeld: Transcript Verlag.
- 矢守克也 (2002). 災害の「風化」に関する基礎的研究 (2) マスメディアの報道量とマクロ行動変数による
測定と表現, 実験社会心理学研究 42(1), 66-82.
- 矢守克也 (2003). トランスクリプトー 4 人の震災被災者が語る現在 (いま), 奈良大学紀要 (31), 253-282.
- 安田裕子 (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程: 治療では子どもが授からなかった当事者の
選択岐路から 質的心理学研究, 4, 201-226.